

教理研究院

サンクチュアリ教会およびUCIを支持する人々の言説の誤り(21)

UCI(いわゆる「郭グループ」)を支持する人々は、金鍾奭著「統一教会の分裂」の日本語訳を広めてきましたが、この書籍は、み言改竄や事実歪曲により、真のお母様をおとしめる内容に満ちています。今回は、「統一教会の分裂」が「文仁進の不法理事会変更」(151ページ)と呼ぶ内容に触れながら、「米国教会理事会乗っ取り未遂事件」の真相を明らかにします。

なお、これらの内容を総合的に理解し把握するためには、「真の父母様宣布文サイト (http://trueparents.jp)」の掲載文や映像をごらんください。

教理研究院

注、真の父母様のみ言および家庭連合の公式発表は「青い字」で、UCI側の主張は「茶色の字」で区別しています。

二十五、「米国教会理事会乗っ取り未遂事件」の真相について

二〇〇八年七月二十九日、真のご家庭の三女の文仁進様が、真の父母様の指示によって米国家庭連合の総会長の人事発令を受け、同年八月十四日「米国総会長」に就任しました。そして八月二十一日、仁進様は米国総会長の職権によって米国教会の

理事会役員を変更しました。これに対し『統一教会の分裂』は

「文仁進の不法理事会変更」(151ページ)と述べています。

しかし、梁昌植氏が真のお父様の指示事項などを整理した「二〇〇九年三月八日、束草報告書」に、米国教会の理事会は「法律による法的権限は理事会が持つ」(14ページ)とあるように、仁進様はそれに基づいて

理事会役員を変更したのであって、「不法理事会変更」をした事実はありません。

ところが文顯進様は、これを「不法理事会変更」であるとし、「元来どおりに理事会を戻す」(『統一教会の分裂』145ページ)ための理事会を招集するようにはしましたが、六対五の票決により理事会の開催自体が中止となりました。顯進様が理事会を開催しようとしたこの事件こそ「米国教会理事会乗っ取り未遂事件」なのです。

(1)「虚偽」に基づく金炳和氏の声明文

当時、米国教会理事会の理事の一人で元北米大陸会長であった金炳和氏は、二〇一七年十月十六日「真実の前に沈黙を破って」と題する声明文を発表しました。その声明文で彼は次のように述べています。

「顯進様は二〇〇九年二月……アメリカ教会の理事会を招

真の父母様宣布文サイトはこちらから↓



集し、理事を本来のメンバーに戻そうとされました。私も当時、アメリカ教会の理事だったので、二〇〇九年二月二十六日に開催された臨時理事会に参加することになりました。ところがこの会議は、最終的に國進様と亨進様、仁進様の反対により無効となりました。……二月二十六日、理事会が無効になった直後、私たち夫婦は顯進様に待って束草に最初に到着し、お父様にお会いし、理事陣復帰のためのこれまでの経緯を報告しようとしたのですが、お父様は……一切報告を聞こうとしませんでした。結局、この対立は繕われなまま、顯進様は翌日の二月二十七日、GPFの世界ツアーのために日本に出国されました」(5ページ)。太字ゴシックは教理研究院(注)しかし、この説明は事実と異なる「虚偽の証言」です。

①顯進様が「二月二十七日、日本に出国」したという「虚偽」

金炳和氏は、顯進様は世界ツアーのため「二月二十七日」に「日本に出国」したと述べますが、実際は、「二月二十八日」に「日本に出国」しています。

マルスム選集608巻258ページを見ると、二〇〇九年二月二十七日午後五時から天情苑で「真の父母様主管、特別会議」(教理研究院の訳。以下同じ)が開催され、真のお父様は次のように指示されました。

「万王の王神様解放権戴冠式が終わった次に、大会をしなればなりません。……三月一日からアベルUNを中心として……総会をしなければなりません」「皆さんが一週間、(原理本体論を受講)するようになれば、私が一週間、講義を聞こうと思います。教育するのがいいですか。しないのがいいですか?返事! 亨進、國進! (はい、教育するのがいいです) いい? 顯進もいいのか? ……あなたたちも一緒に受ける? (はい)

では、明日、明後日(三月一日から正式プログラムを組みます。……一人も抜けることのないようにしなさい)(マルスム選集608-269)

真の子女様方は、三月一日から始まった第六回「神様摂理史の責任分担保解放圏完成宣布教育」(原理本体論教育)に参加されましたが、顯進様は二月二十八日に日本に出国し、真のお父様が指示された三月一日のアベルUNを中心とした総会や原理本体論教育には参加されませんでした。

当初、顯進様は「日本大会(二月二十七日)三月一日)を皮切りに……主要国家を巡回する予定」(『統一世界』二〇〇九年三月号103ページ)でしたが、実際の日本大会は「二月二十八日(三月一日)(中和新聞)二〇〇九年三月号12ページ)に変更し実施しました。

真のお父様は三月八日、いわゆる「束草事件」で次のように

語っておられます。

「顯進、あなたが大会を行ったのですが、どこで行ったの? ……日本大会をするとき、あなたが成功裏に終えたと言い、「マニラに行く」と私に電話したでしょう? 私は何も言わなかったよ。『早く戻って来なさい』と言ったよ。マニラになぜ行くのかと聞かなかったのです。……(注、真のお父様が)『早く戻って来なさい』と言ったとき、『早く戻る』と言っておいで、どうして遅らせるの?」(マルスム選集609-127)

このように、顯進様は三月一日の日本大会を終えた後、フィリピンに行く前に真のお父様に電話したとき、お父様は「早く戻って来なさい」と語られ、顯進様を待っておられました。

しかし顯進様はすぐには戻らず、三月一日から始まった原理本体論教育の終わった翌日の三月八日、いわゆる「束草事件」の早朝の訓誡会に途中から参加

し、真のお父様はそのような顯進様の「不従順」な行動に対し叱責されたのです。

金炳和氏が、理事会開催日を米国時間の二月二十六日にして「ごまかそう」とする理由は、真のお父様が二月二十七日に語られたみ言を直接聞いていないこととし、顯進様がみ言に反する行動を取っている事実を隠蔽したためと考えられます。

②米国臨時理事会は、実際には韓国時間の二月二十七日に開催

前述のとおり、金炳和氏は声明文で米国教会の臨時理事会が「二月二十六日に開催された」と述べています。しかし、梁昌植氏は「二〇〇九年三月八日、束草報告書」で次のように報告しています。

「二月二十七日(米国時間二月二十六日)朝、韓国に入学された顯進様は束草におられた父母様にお目にかかる前に、(韓国)マリオットホテルにとど

まりながら国際電話を通じて米国教会の理事会を招集した」(15ページ)

上記の内容を総括し、顯進様の行動を整理すると次のようになります。

二月二十七日午前・韓国・ソウルのマリオートホテルから国際電話で米国教会の臨時理事会を開催

二月二十七日午後・韓国の東京に到着

二月二十八日午後・韓国から日本に出国

金炳和氏が述べている米国教会臨時理事会が「二月二十六日に開催された」という説明は「ごまかし」があり、これは東草に行く直前、米国時間にすれば「二月二十六日に開催された」というものであり、実際には韓国時間の「二月二十七日」なのです。このように、金炳和氏の声明文には「虚偽」が含まれています。

実を求めて』で次のように述べています。
「仁進様の人事が『お父様の人事でなかった』ことは、後に、当時の米国大陸会長が明かしています。……お父様の指示と世界本部の指示が『違って』いた」(37ページ)

しかし、この当時の米国大陸会長である金炳和氏の証言は「虚偽の主張」です。

いわゆる「文仁進様の米国総会長任命事件」については、すでに「真の父母様宣布文サイト」で真相を明らかにしています (https://trueparents.jp/?page_id=4514) が、簡潔に述べると、仁進様は「二〇〇八年七月二十九日、真の父母様の指示」で家庭連合の「米国総会長」の人事発令を受け、就任したのです。

また、二〇〇九年二月二十四日付で、世界宣教本部(当時)は公文を発信し、そこには「全ての組織は真の父母様の指示を受け、文亨進世界会長が総括す

(2) 『統一教会の分裂』は、食い違つゝ虚偽の証言でつづられた書籍

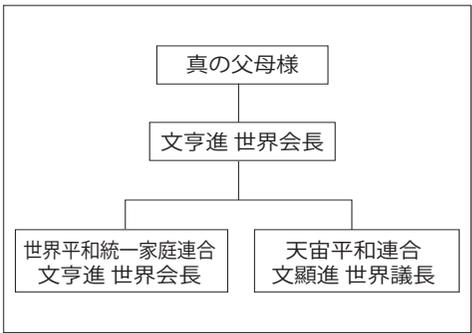
① 食い違つ「K氏の証言」

『統一教会の分裂』は、次のような「K氏の証言」(123ページの脚注)を掲載しています。

「理事会騒動が起きた直後、文顯進は韓国に立ち寄り創始者(注、真のお父様)に会って苦境に立たされた。……何故、理事会を全て替えたのか」……

「お前が米国の責任者なのに、何もしなかったとは何ごとか。もう一度、全て替える」と(お父様は)指示した(太字ゴシックは教理研究院、以下同じ)

このように「K氏の証言」では「理事会騒動が起きた直後、文顯進は韓国に立ち寄り」とし、顯進様が米国におられたとき騒動が起き、直後韓国に寄ったかのように述べ、真のお父様が「お前が米国の責任者なのに、何もしなかったとは何ごとか。もう一度、全て替える」と指示



2009年2月24日付の公文の図表

る」とあり、右のような図が添付されています。

『統一教会の分裂』は、この図に対し「宣教本部側で文顯進を意識し急遽、作った公文」(145ページ)であると述べますが、これは「真の父母様の特別指示」です。いわゆる「東草事件」が起こった二〇〇九年三月八日、真のお父様は次のように語っておられます。

「韓国の外的な仕事を誰が責任持ったの? (黄善祚会長です) 黄善祚! (はい) 黄善

されたとしています。

それに対して、「文顯進前補佐官K氏の証言」(147ページの脚注)によれば、理事会騒動の直後、「他の兄弟より早く東草に到着した文顯進は金炳和と共に創始者に経緯を報告しようとしたが、創始者は完全に耳を閉ざしていた」(146〜147ページ)とあり、両者の証言は食い違っています。また、この「創始者は完全に耳を閉ざしていた」との説明は金炳和氏の声明文と類似します。

② 「仁進様就任以後の改編によつて除外された」人物名の食い違い
『統一教会の分裂』を見ると、「金炳和氏の緊急報告文」では「仁進様就任以後の改編によつて除外されていた(理事は)金起勲、朴ジョンヘ、フィリップ・シエンカーなどの三人」(144ページの脚注)と述べています。

真のお父様は、「組織体制で見れば、亨進の指揮下に全て(の組織)が入ったのであつて、郭錠煥ではないのです。……私も入っているのです。私も。私が入っていると思わないのです」(マルスム選集609-126)

真のお父様は、「組織体制で見れば、亨進の指揮下に全て(の組織)が入った……私も入っているのです。私も。私が入っていると思わないのです」(マルスム選集609-126)

真のお父様は、「組織体制で見れば、亨進の指揮下に全て(の組織)が入った……私も入っているのです。私も。私が入っていると思わないのです」(マルスム選集609-126)

別指示」の公文や図を見て、「非

ところが、「当時、文顯進に

随行していたK氏の証言」(『統一教会の分裂』124ページの脚注)によると、仁進様就任以後の改編によつて除外された理事は「金炳和、パク・ジョンヘ、フィリップ・シエンカーなど三人」となっています。「金炳和氏の緊急報告文」と「当時、文顯進に随行していたK氏の証言」では除外された人物名が食い違っているのです。

「統一教会の分裂」は、食い違う内容であっても平然と記しています。これは、事実関係と「真偽」を検証せず、証言をただうのみにし情報を垂れ流しにする「無責任」な内容と言わざるをえません。

(3) 櫻井正上氏は「虚偽」に基づく金炳和氏の証言にだまされている
① 「お父様の指示と世界本部の指示が『違って』いた」?

櫻井正上氏は、その著書『真

常に不快な気分を現わし、職権で米国統一教会理事会を召集」(『統一教会の分裂』145ページ)しようとしたのであり、これがいわゆる「米国教会理事会乗っ取り未遂事件」となったのです。

② 理事会変更の目的は、「文仁進様の地位を剥奪するため」

櫻井正上氏は次のように述べています。

「仁進様の人事が『お父様の人事でなかった』ので、顯進様は「お父様の意向を確認された上で、改めて米国家庭連合の理事会を原状復帰しよう」(『真実を求めて』37ページ)とされた。これが「顯進様側の理事会占拠」、言わば『クーデター』(同)として「顯進様の暴挙として報告、お父様が激怒」(同、136ページ)された。そして、「二〇一〇年二月三日、顯進様、米国家庭連合理事長解任」(同、137ページ)された。

しかし、これは事実と反する「虚偽の主張」です。マイケル・ジェンキンス氏は、二〇一〇年七月一日の「報告書」で次のように報告しています。

「(二〇〇九年二月二十七日)我々は国際電話会議により理事会を行いました。…: HSA-UWC (米国の世界基督教統一神霊協会) 理事長である仁進様が開会を宣言しました。仁進様はお父様の指示に基づいて、理事会に変更を加えないという動議を提出し…: 理事会は六対五の票決により、会合を閉会することを決め、変更が防止されました。…: (お父様は) 会合の継続 (理事会を変更すること) を支持して投票した理事全員に辞任要求通知を出すよう要請されました」(4ページ)

だったのであり、二月二十七日の国際電話を通じての米国教会理事会は、六対五の票決で、理事会の会合が中止されたのです。このことで、顯進様を支持して投票した五人の理事全員が辞任することとなりました。そもそも、顯進様は法的にも実質的にも権限を持った理事ではなかったため、理事会の票決に参加する権限はありませんでした。櫻井正上著『真実を求めて』に「二〇一〇年二月三日、顯進様、米国家庭連合理事長解任」と述べているのは事実と反します。事実は、仁進様が法的権限を持った正式な「米国教会の理事長」だったのです。真のお父様は辞任することになった理事に対し、次のように語っておられます。

そのことに対し、真のお父様は「手を挙げたこと自体が問題」であると叱責されました。梁昌植氏の「二〇〇九年三月八日、東草報告書」は次のように報告しています。

「文亨進会長は世界会長として創始者であるお父様の命令が『現理事会を開かず東草にまじらず集結するように命じられた』というお父様の意を伝えながら、『理事会の強行自体が父母様の意に逆らっている』ということを警告しました」(15ページ)

このように二月二十七日、韓国で開会された国際電話による米国教会の理事会の会合でオプザーバーとして参加した亨進様は、真のお父様が「現理事会を開かず東草にまじらず集結するように」命じられたことを理事たちに伝え、「理事会の強行自体が父母様の意に逆らっている」とまで警告しています。前もってお父様から「理事会の変更を

と云う必要はないのです。…: 本人自身が問題です! 本人自身が、そのような思想を持っているので、手を挙げたのであって、そのような思想がなければ、手を挙げると言っても挙げないようにするのです」(マルスム選集609-126)

真のお父様は、理事会を変更しようとした。乗っ取り未遂事件^①に対し、「手を挙げたこと自体が問題」であると語っておられます。

また、ジェンキンス氏は「報告書」で次のように報告しています。(注、「報告書」で、顯進様の言葉の部分は「茶色の字」で、真のお父様のみ言は「青い字」で表記)

「(二月二十四日) イーストガーデンの顯進様宅での顯進様とHSA-UWCの代表らとの会合で、…: 顯進様はお父様の補佐官に電話するよう要求しました。…: 電話がつかないが、彼は理事会の変更をしないように

というお父様の願いを確認しました。顯進様はそこに集まった我々に対して、これは心得違いの指導者たちがお父様の指示を歪曲しているだけだと告げました。…: お父様が間違った情報を与えられた結果として間違った指示が出されたのだと、…: (理事会の) 変更については後でお父様と話し合うし、自分はお父様の全面的な支持を受けていると言いました。…: 顯進様は理事会をとにかく開き、自分が要求している変更を実行するよう要求しました」(4ページ)

このように、顯進様は米国教会の理事会に「心得違いの指導者たちがお父様の指示を歪曲している」「お父様が間違った情報を与えられた結果として間違った指示が出されたのだ」と述べ、理事会の「変更については後でお父様と話し合う」と言って説得したため、一部の理事たちは顯進様を支持して票決で手を挙げてしまったのです。

しないように」と伝えられているにもかかわらず、五人の理事たちは、顯進様を支持して票決で手を挙げたのです。この事実を知られた真のお父様は、深刻になられ、お父様の指示に対して背信し、不従順な行動を取ってしまった理事たちを、いったん辞任するようにされました。

ところが、櫻井正上氏は、「顯進様の暴挙として報告」されたから「お父様が激怒」されたのだと勘違いしています。真のお父様は、理事たちが「手を挙げたこと自体が問題」だったと語られ、そのことを叱責しておられるのです。

また、ジェンキンス氏は、顯進様の要求を次のように述べています。

「自分(顯進様)が要求している変更を実行するよう要求しました。…: 理事会の公式通知は、理事会に投票権を持つ新しい理事を任命することを要請し

ていました。これは復帰ではありませんでした」(4ページ)

このように、顯進様の要求の本当の狙いは、単に「仁進様就任以後の改編によって除外されていた…: 三人を理事職に再び元通りに復帰」(「統一教会の分裂」144ページの脚注)させるためではなく、「新しい理事を任命すること」すなわち「顯進様が直接理事長になり実際の米国責任者」(145ページの脚注)になるための理事会変更の要求だったのです。

これは、米国教会理事長である文仁進様の地位を剥奪するため^②の変更だったのであり、まさしく顯進様による「米国教会理事会乗っ取り未遂事件」だったのです。最終的に理事会の票決は六対五となり、顯進様を支持する票は五票にとどまり乗っ取りは未遂となりました。

③悔い改めた「理事陣」と、悔い改めなかった「顯進様」

櫻井正上氏は、いわゆる「東草事件」による顯進様の職務停止について、「これらの一連の出来事は即ち、『長子』を潰し、世界摂理を破壊し、統一運動の方向性を見失わせようとする『サタン業』」(『真実を求めて』38ページ)であり、「顯進様はこれを『天宙史的葛藤』として見つめられた」(同)などと述べています。

しかし、真のお父様はいわゆる「東草事件」のときに次のように語っておられます。

「万王の王神様(解放権) 戴冠式^④のとき、顯進が来たの、郭錠煥? …: (十五日、そのときは行事で参加できませんでしたが) …: 重要な時間に自分が抜けたら、自分の息子、娘たちが分からないと思うの?」(マルスム選集609-127)

「十五日に韓国に來なければなりません。自分の息子、娘たちに伝授して生かすために來なければならぬのです。そのよ

うな重要な会議であるのに、なぜ参加しないのですか？ このようなことは話す必要がない！金起勳を顯進の代身として立てるのです。顯進は勉強しなければなりません」（マルスム選集609―131）

二〇〇九年一月十五日、真のお父様は「万王の王神様（解放権）戴冠式」を挙行されましたが、その式典に顯進様に参加しなかったことに対し、「なぜ参加しないのですか？ このようなことを話す必要がない」と叱責され、お父様は「金起勳を顯進の代身として立てる」ようにされたのです。お父様は、金孝律氏に人事措置を読み上げるよう指示され、金孝律氏は「顯進様はUPPF会長とGPFから一年間休み……」（同609―134）というお父様の指示を述べました。

櫻井正上氏は、米国理事会のこの事件が「顯進様の暴挙として報告、お父様が激怒」され、

それが「顯進様の職務停止を命じる直接的な原因」（『真実を求めて』37ページ）だったと述べますが、真のお父様は「万王の王神様（解放権）戴冠式」に顯進様が不参加だったことを叱責され、「金起勳を顯進の代身として立てる」との人事措置を命じておられるのです。

梁昌植氏の「二〇〇九年三月八日、東草報告書」は次のように報告しています。

「真の父母様の指示を破って顯進様を支持した金炳和大陸会長、ブリッジポート大学総長ニール・サローネン、UTS総長タイラー・ヘンドリックス、BIA校長ヒュー・スパージョンは免職になりましたが、後で各自の悔い改めとともに父母様の特別容赦で、次々と復職して現在も仕事をしています」（26ページ）

このように、真の父母様の指示に反して顯進様を支持した理

事たちは、いったんは免職となりましたが、その後、各自が悔い改めたことにより、彼らは真の父母様からの許しを受けて次々と復職しています。

しかし、顯進様は一連のことを「天宙史的葛藤」「長子」を潰し、世界摂理を破壊（する）……『サタンの業』という恣意的な観点から見詰め、「真の父母」に対する過ち、および不忠を、悔い改めることをせず、真の父母様から許されなまま、真の父母様とたもとを分かたつようになったのです。そして、二〇〇九年九月十日を最後に、真の父母様の前に姿さえ見せなくなり、今日に至っています。

以上のように、金鍾奭氏の『統一教会の分裂』や櫻井正上氏の『真実を求めて』は、金炳和氏が述べる「お母様の陣頭指揮の下、顯進様を完全に排除する」（『真実を求めて』「真実の前に沈黙を破って」5ページ）という、虚偽のストーリーを

描くための、虚偽の証言」などを、まるで真実であるかのように仕立て上げて書かれた書籍なのです。

二〇〇九年三月八日のいわゆる「東草事件」のとき、真のお父様は「カイン・アベルのUNを中心として一つとなれるこ（こ）（真の父母）が本部であつて、顯進がいるところが本部ではありません」（マルスム選集609―122）、「皆さんが今後、生きるとしても、先生の生き方と憲法（み言）を中心として、主流に従っていかなければなりません」（同）と述べ、警告のみ言を語っておられます。

私たちは「真の父母」を不信させようとするUCI側の広める、虚偽の証言」に惑わされてはなりません。どこまでも、天の父母様（神様）と真の父母様に対する、孝情」を持ち、「主流に従って」歩んでいく希望の実体となっていかなければなりません。